

## 書 評

# The Use of Economics Literature, Ed. by John Fletcher.

London, Butterworths, 1971, 310 p.

宮 地 見 記 夫\*

本書は、イギリスの、主に大学図書館に勤務しているライブラリアン、それに経済学の研究者あわせて22名の執筆者によって、24章にまとめられている。各章の順を追って、内容の概要を以下に示すことにする。

第1章 序論(執筆者J. Fletcher)

第2章 図書館と文献の探索(J. Fletcher)

British Museum, Library of Congress  
といった代表的 National Library のほかに、すぐれた経済学文献の所蔵を誇る大学、公共図書館が紹介されている。特に重要な図書館については、蔵書の特徴、利用の方法が案内される。

第3章 経済学図書館の利用 (C. A.

Clossley) 図書館で用いられている図書分類法、目録規則、カード配列規則、図書館サービスの概略を説明。

第4章 参考図書と書誌のツール (M. Shafe)

第5章 定期刊行物(J. Fletcher)

経済学の重要な雑誌の解題。 *Kyklos*, *Metroeconomica*, *Economia internazionale* 等々重要と思われる title が見えないのは、配慮を欠いている。

第6章 未刊行資料 (J. Fletcher)

国際機関、政府、学術団体における非公

式の文献が、かなり詳細にとりあげられている。これまでの文献案内に比較して特色ある1章である。

第7章 英国政府刊行物 (D. C. L. Holland, S. Edge)

第8章 米国政府刊行物 (L. Fishman)

第9章 国際機関刊行物 (E. C. Blake)

第10章 経済統計 (J. Fletcher)

第11章 一般経済学 (J. Fletcher)

第12章 経済思想史 (R. D. C. Blake)

第13章 経済史 (G. N. von Tunzeleman)

第14章 数理経済学 (F. G. Pyatt)

第15章 計量経済学と方法 (C. E. V. Lese)

第16章 経済発展、成長、計画 (S. K. Nath, J. E. K. Corbett)

第17章 景気循環、短期的経済の安定、価格と所得 (D. R. Crome)

第18章 労働経済学、労使関係 (G. S. Bain, G. B. Woolven)

第19章 工業経済学 (J. R. Cable)

第20章 農業経済学 (K. E. Hunt)

第21章 金融経済学 (G. E. Wood)

第22章 財政学 (A. Williams)

第23章 国際経済学 (A. G. Ford, G. E.

---

\* みやち みきお 一橋大学経済研究所資料調査室

Wood)

#### 第24章 経済社会学 (A. F. Heath)

第7章から10章までは、英・米(殊に英国)と国際機関で刊行されている重要な経済資料と、それらを follow するためのツールを紹介。

第11章以下第24章までは、各領域において定評のあるテキストブック、学術誌、主題書誌が解題されている。

編者の J. Fletcher (ウォーウィック大学において経済学を専門領域としているライブラリアン)は、序論において、経済学の研究者および研究者を志向している人に、a. 経済学のさまざまな領域に対してどのような資料があり、どれが重要であり価値があるのか、また最も役にたつのはどれか、b. 重要な文献を探すためのツールにはどんなものがあるか、c. どこに行けば資料が見つかるのか、を案内することが本書の狙いであると述べている。この狙いに勿論異論はない。問題は、それが本書において、どの程度達成されたかということである。本書のような文献案内を

評価する基準の一つに収録範囲がある。しかしながら、文献案内(だけではないが)は、執筆者の活動している国の研究事情をはっきりと反映するだけに、評価する人、利用する人の基準の置きかたによっては、満足(あるいは不満足)の程度は違うから、多くの人の同意を得られるような判断の基準を設けることはなかなか困難である。本筋から多少逸脱することをお許しいたたくとして、イギリスにおける社会科学の文献利用調査<sup>1)</sup>によれば、経済学の領域の図書および論文において引用された文献の94%が英文文献であったという結果が示されている<sup>2)</sup>。こういったイギリスの研究事情は、やはり本書にも投影していると考えられる。文献は英文文献に偏っているし、紹介された図書館も英米の図書館だけである。こういった偏りを了解さえすれば、本書はかなり利用価値をもっている。しかし、ぜいたくな望みを掲げて、真にユニバーサルな文献案内の出現を期待しているわれわれには、充分には満足できないというのが私の結論である。

1) P. Earle and B. Vickery: Social Science Literature Use in the UK as Indicated by Citations, *Journal of Documentation*, 25 (2), pp. 123-141 (June 1969)

2) ちなみに、日本の経済学における文献利用について私が調査したところでは、次のような結果が得られた。英(42%), 日(39%), 独(8%), 仏(3%), 露(5%), その他(3%)。詳しくは拙稿「引用文献からみたわが国経済学の文献利用」図書界, 22 (3) pp. 94-98 (Sept. 1970)参照。

#### 編集後記

1972年がとうとう終わってしまった。3年連続年1回の発行という不名誉な結果になり、編集委員として諸兄姉に会わせる顔がない。特に研究余滴にご執筆下さった西村先生には1年以上も原稿をお預かりしたまゝになっていて大変失礼なことになったことを深くお詫び申し上げる。

今回は、塩田・川原両氏の情報検索機械化の二論文をいたゞき、コンピューター特集のような形になった。そのためページ数が通常号よりも多くなり、読みごたえのある号となったことで発行遅延の埋め合わせにさせていただきたい。この労作をお寄せ下さった両氏に対し、感謝と敬意を表したいと思う。(越知)